

三、口ハナ尊者

昔、印度で比丘たちは、托鉢修行した。托鉢して食を乞うのは、慳貪な人たちを濟度して、尊い布施の徳を成就すためであった。

口ハナ尊者は、毎日のように、一人の富んで慳貪邪見なる金満家の前に立つて、食を乞われたけれども、その家の主人は、慈悲の心なく、貪欲で、邪見であるために、食を布施しようとはしなかった。

けれども口ハナ尊者は、決してこの人を見捨てなかった。雨の日も風の日も、毎日その家の前に立つて食を求められた。けれども決して布施しなかった。尊者は屈せず、仏の道を伝えたいために一年、二年、三年……遂に七年と十ヶ月の間、その家に托鉢せられた。

ところがある日、主人が留守であった。しかも家内にことわられて、今日も空しく帰ってゆかれた。その途中でふと主人に出会われた。すると主人は、

「おい坊主、お前は今日も、ものを貰いに、私の家に行ったか。」

「はいまいりました。」

「何かもらったかい。」

とからかった。すると尊者は、

「はい、有難いものを頂戴致しました。」

「何！ 有難いものをもらった？」

と聞くなり、怒鳴って、彼は急いで我が家に帰った。家内にむかつて

「あれだけ、坊主にものをやってはならないと言って禁めてあるのに、一体今日何をやったのか。けしからん。何故に施したか。何を施したか。」

と調べはじめたが、誰も何も布施してはいなかった。そこで、

「それでは、あの坊主、ニコニコして礼など言いおつたが、偽言をぬかしたのだな、明朝来たらきつといじめてやる。」

翌朝、口ハナ尊者は、何時もの通り、その庭にお立ちになった。すると主人は待っていたとばかり大声はり上げて、

「これ嘘つき坊主、汝は昨日会った時、有難いものをもらいましたと礼を言ったので、家に帰って、叱りつけたが、家内は何もやった覚えはないという。汝は出家の身分でありながら、嘘をついて人をあざむいたな、糞坊主！」

とかんかんになって怒鳴った。
すると尊者は、

「いや、確かに昨日は有難いものを頂戴しました。私はすでに七年十ヶ月の長い間、毎日毎朝ここに立つて食を乞いましたが、何も頂くことは出来ないで、何時も冷たい言葉で追い払われて来ました。一度だって温かい親切な言葉さえ頂くことは出来ませんでした。」

ところが昨日の朝も、私は何一つ布施して頂くことはできなかったが、今迄にない、優しい親切な言葉で断られました。」

優しい言葉、私は、品物や食物を頂いたよりも嬉しく、その優しい言葉を頂戴致しました。

私が有難いものを頂いたとは、その『優しい断りの言葉』のことであります。」と厳かにお答えになった。その口ハナ尊者の一言一句は慳貪な主人の胸を打った。見る見る彼の顔には、後悔、そして懺悔の色が走った。

そして彼は言った。

「尊者よ、許して下さい。私は心得違いをしておりました。かかる尊いみ心とも知らず、私は糞坊主、偽者と罵りました。

七年十ヶ月もそういう尊いみ心で門に立つて下さったとも知らず、私は尊者を冷たくおい払って無礼をくりかえしました。

しかるに尊者は、私を救わんがために、根気よくお出で下さいました。おわびの申しようもございません。

かかる私の悪口雑言をお叱りもなく、お怒りの御様子もなく、優しいお言葉を頂きました。

物はくれなくても、優しい言葉を貰って、何よりも嬉しい布施を頂いたとの尊者の尊いみ心を承りまして、私は何とおわびしていいかわかりません。

お許し下さいませ。」

とて懺悔し、尊者に心からの供養をなし、その説法を聞いた。

尊者は、

「ものを慈しみ、無我に生きよ。」

と懇切にお説きになった。一家は尊者の教に動かされて、み法に生きるようになった。

一言の布施、決して軽くはない。

小善の行われない処には、時に大悪がひそむ。

七年十ヶ月の間、よく忍耐し、精進された尊者の心を思う時、我等はいよいよ本気になって精進努力しなければならぬことを思う。

尊者の心、即ち仏の心である。

そこにのみ無碍の大道が開いて来る。精進なる哉。忍なる哉。